

滋賀の高校生が選んだ！（令和3年度優秀作品）

しがはいすくーる おすすめ本50選



『medium 霊媒探偵城塚翡翠』
相沢 沙呼 著
講談社

推理小説家であり難事件も解決する香月史朗と、霊媒師である城塚翡翠が出会い、事件を解決していくミステリー小説。この本は、1つの事件の内容は軽く、私でも理解できるのだが、最後の最後でどんでん返しを受ける。帯には「すべてが、伏線。」とあるように、今までのものが全て崩れていく内容だ。綺麗な文章で読みやすく、続編も発売している。ミステリーが苦手であっても大丈夫なので、ぜひ手に取ってみてほしい。

（国際情報高校2年 堀内 陽菜さん）



『雨の降る日は学校に行かない』
相沢 沙呼 著
集英社

この本は、教室の中うまく自分の居場所を見つけられず、学校生活に息苦しさを覚えている女の子たちの、6つの物語です。短編集になっていて、どの話も女の子が主人公です。女子特有の感覚がすごくよく描かれていて、共感するところが多いです。読んでいてとても心苦しくなることもあるけれど、「すごいな」「えらいな」や「頑張れ」と応援したくなります。一緒に寄り添って読むことができる素敵なお本です。

（大津高校3年 三宅 梨香さん）



『赤ずきん、
旅の途中で死体と出会う。』
青柳 碧人 著 双葉社

書名の通り、主人公の赤ずきんの旅の途中で殺人事件が起こるストーリー。物語の中の登場人物は、誰もが知っている童話の人気者、シンデレラやハンスエルとグレーテルなどさまざま！次々に起こる殺人事件と、事件を解決するための決めゼリフ「あなたの犯罪計画は、どうしてそんなに杜撰なの？」から繰り広げられる赤ずきんの見事な推理ショー！！人気童話×ミステリーの異色推理小説！全5章大どんでん返しの結末も！ぜひ読んでみてください！

（国際情報高校2年 武田 夢咲さん）



『死にたがりの君に贈る物語』
綾崎 隼 著
ポプラ社

この本は、SNSが発達し、生活の一部となっている今だからこそ、読む人全てが考えさせられる、そんな本です。熱狂的なファンを持つ小説家ミササキオリの、作品の完結を目前にして入った計報により、完結を楽しみにしていたファンが集まり、物語を模倣していくお話です。予想しながら読んでも毎回予想とはかけ離れた展開で、最後までおもしろい本です。「あなたじゃなきゃ駄目なんだよ」という本の最後の一行にとっても心が惹かれました。

（国際情報高校2年 赤松 優奈さん）



『シャイロックの子供たち』
池井戸 潤 著
文藝春秋

ある銀行で、不可解で様々な事件が起こる様子を、10話構成で、登場人物1人1人の視点から書かれた作品。作者が元銀行員ということで、読み手にリアルさと臨場感がとても伝わってくる。登場人物1人1人に人間味があるとても良い作品。この本の見所は、人間が持っている良くない部分が表れ、親近感がわく所だ。読みやすい構成なのでとてもおすすめです。

（守山高校2年 谷内 大和さん）



『いのちはなぜ大切なのか』
小澤 竹俊 著
筑摩書房／ちくまプリマー新書

「いのちはなぜ大切なの？」と問われたとき、あなたならどう答えますか？この本は、ホスピスという終末期医療に携わる医師によって書かれた本です。命の在り方は様々で、それを踏まえた上で、この問いの答えはあるのだろうかと一緒に考えることができる作品です。また、文中の「思春期は自己を見つめる大事な時期」と書かれている部分のように、悩みにそっと寄りそい、自分という存在の大切さにも気づかされる、そんな心に沁みる一冊です。

（草津高校3年 高岡 美羽さん）

『本当は怖い日本の神話』
古代ミステリー研究会 編
彩図社

私が紹介する『本当は怖い日本の神話』という本は、アマテラスやイザナミ・イザナギなど、誰もが一度は聞いたことがある日本の神話に出てくる人物や出来事の裏側を書いた本です。誰もが一度は聞いたことがある人物や名所がこの本にはたくさん出てくるので、現実味があり、小説などのフィクションの作品が苦手な私でも、一度読んだだけで理解することができました。本が大好きな人より、どんな本を読んでも飽きるといふ人におすすめします。

（米原高校2年 田谷 彩音さん）



『ディズニー式 サービスの教え』
小松田 勝 著
宝島社新書

ディズニーランドで一番大切にされていることはゲストへの温かいサービスだ。すべての来園者がVIPで、誰でも安心して楽しめる環境が整えられている。またパーク内にはあまり自動販売機は設置されず、積極的にキャストと来園者がコミュニケーションをとれるように工夫されている。アトラクションに頼らないウォルトのサービスの教えが、世界中の人を惹きつける夢の国にしていることが、この本を読めばわかる。

（MIHO美学院中等教育学校2年）



『君は月夜に光り輝く』
佐野 徹夜 著
KADOKAWA／メディアワークス文庫

この本は、発光病という不治の病を患う1人の少女、渡良瀬まみずと、平凡な男子高校生で物語の主人公である岡田拓也とのラブストーリーです。過ごしていくうちに「生きる」とはなにか、答えの無いこの問いに悩みもがきながらも考え続けます。この二人が出会ったことで変わっていく、お互いの心情の変化なども読み取れるのがおもしろく、物語が進むにつれて、大切な人の死にどう向き合うべきなのかについても考えさせられる作品です。

（国際情報高校1年 塚本 るるさん）



『一度死んでみた』
澤本 嘉光／鹿田 けい子 著
幻冬舎文庫

私は同年代に『一度死んでみた』を読んでほしいです。この本の主人公は、お父さんが大嫌いな女子高校生で、口を聞こうとしてもいませんでした。しかし、ある日、父が死んだと聞いて、ちゃんと話してこなかったことにとっても後悔をします。そんな中、父は1度死んだだけで知り、父を守るため決死の行動に出ます。果たして父は生き返るのか。コメディも詰まった親子愛の溢れる作品となっています。ぜひ、読んでみてください。

（米原高校2年 児玉 翔琉さん）



『星の王子さま』
サン＝テグジュペリ 著／河野 万里子 訳
新潮文庫

「ものごとはね、心で見なくてはよく見えない。いちばん大切なことは、目に見えない。」この言葉は、物語に出てくるキツネが言う言葉です。私は、この言葉の一番大切なことは過程だと思っています。物事に対して費やした時間こそが、大切な、心で見るとは思いませんでした。また、大人になっていくにつれて表面的な価値しか見ないようになってしまった時に、本当に大切なことは何かを考えさせてくれる物語だと思いました。

（国際情報高校1年 馬場 せつさん）



『青い鳥』
重松 清 著
新潮社

この本では、国語の先生なのに、言葉がつかえてうまく話せない、中学の非常勤講師、村内先生を中心に短編の話がいくつか書かれています。この本では、「正しいこと」ではなく「大切なこと」を考えることをテーマにしていて、どの年代においても教材となりうる小説です。本書あとがきで、「初めてヒーローの登場する物語を書きました。」と作者は述べています。小さい頃に憧れるヒーローとは少し違うヒーローの話を是非読んでください。

（守山高校1年 太田 衣葉さん）



『また、同じ夢を見ていた』
住野 有る 著
双葉社

学校に友達いない主人公が、学校で出された「幸せとはなにか」を考える宿題を主軸に、手首に傷がある南さん、とても格好いいアバズさん、一人暮らしのおばあちゃんなど出会う、人生について考える、ちょっと不思議で心温まるお話。自分の人生は、どこかで思うように進まないかもしれない。でも、今の自分の選択が今後の人生を良い方向に進めることができる。そんな気持ちになれる作品です。

（国際情報高校2年 宮崎 奏良さん）



『君の辟臓をたべたい』
住野 有る 著
双葉社

自分が死んだときに泣いてくれる友達はいらぬだろうか。私はこの本を読んで、そんな感想を持ちました。ここ最近コロナ感染予防のために、外出や面会を自粛することが多く、友達ともあまり会っていません。そんなとき、私は、自分が今死んだら、誰も気付かないのではないかと不安におそわれます。物語の中で、人と関わろうとしない主人公は、ヒロインの死をきっかけに友達を作ります。二期学では友達を作ろう。そう思えた本でした。

（守山高校2年 真田 俊介さん）



『人間失格』
太宰 治 著
集英社文庫

「太宰治の人生は本当に幸せだったのだろうか。」とこの本を初めて読み終えたとき、つい口に出してしまいました。ベストセラー作品をいくつも産み出して、著者として一流な太宰治の一人の人間としての苦難や葛藤、人としてのあり方が書かれている作品です。太宰治にとっての幸せは何かを何度も何度も読み返しながらかけてみてください。この答えが分かったときには、人として大きな成長を遂げているはずですよ。

（虎姫高校1年 野崎 晃大さん）



『ツナグ』
辻村 深月 著
新潮社

本の題名になっている「ツナグ」は、本中では一生に一度だけ、死者との再会を叶えてくれる仲介人「使者（ツナグ）」として登場します。生者も死者も、たった1人と1度しか会うことができないなかで、自分なら誰に会いたいと思うだろうか、そして、自分が死んだら誰かが会いたいと思ってくれるだろうかと考えさせられました。

(国際情報高校2年 西村 美優さん)



『目を見て話せない』
似鳥 鶏 著
KADOKAWA

この本は、コミュ障な大学生の主人公が、身近な謎を解決していくミステリーです。コミュ障の特徴である、まわりの空気を読みすぎる、相手の反応を過剰に気にしてしまうなどの心理的な描写がしっかりされているところが面白いです。コミュ障あるあるがいっぱいあって、コミュ障の人や人見知りする人は、すごく共感できる本だと思います。コミュ障にも色々なタイプがあり、人との関わり方を学ぶことのできる作品です。

(米原高校2年)



『あやうく 一生懸命生きてた』
ハ・ワン 著/岡崎 暢子 訳
ダイヤモンド社

私はこんなに頑張っている。でも自分より大変な人はもっといる。もっと頑張らないと。そんな風に日々を過ごす私達に、頑張りがすぎない？その頑張りは本当に自分の本心？と問いかけてくれる本。結果主義のこの社会で、頑張る事に疲れた人、誰かにこの頑張りを褒めて欲しい、そんな人たちにぜひ読んでもらいたいそんな1冊です。

(長浜北星高校3年 藤本 さつきさん)



『あの夏の正解』
早見 和真 著
新潮社

「夏の甲子園中止」この一言でたくさんの球児の夢と目標がなくなった2020年の夏。甲子園がないのに野球を続ける意味があるのか自問自答をし、そんな彼らの姿を見て、どう声をかけたらいいか迷い悩む監督。悩みに悩んで導いた答えの先に、何があって何を求めるのか…。世界中を脅かす新型コロナウイルスによるパンデミックの中、甲子園のない夏にもがき苦しむ「あの夏」の物語。

(草津高校2年 高岸 あのんさん)



『それぞれの名前』
春間 美幸 著
講談社

「みんな、自分の下の名前って、気にならない？」この問いかけから物語は始まります。容姿も名前もそっくりで、いつも間違えられてしまう双子のユカとチカ、女の子っぽい自分の名前がコンプレックスなノゾミなど、6人の登場人物が、それぞれの名前の由来を知り、かえがえのないたった一つの自分の名前の大切さを教えてくれる話です。読んだらきっとあなたも自分の名前が更に好きになることでしょう。

(米原高校1年 西野 美裕さん)



『パラドックス13』
東野 圭吾 著
講談社文庫

“P-13現象”に襲われた地球。その先には人の消えた世界が広がっていた。世にも奇妙なこの地球に取り残された13人の我々。論理的な思考では解決できないハニングに現実味がおびない。地球の全てを破壊するかのごとく異常気象が襲いかかるにつれ、登場人物の本性が暴かれていく。思いもよらない展開にハラハラドキドキなストーリー。ラストシーンのセリフで皆が発狂まちがいにし！！最後まで見逃すな！

(虎姫高校1年 田中 美優さん)



『マスカレード・ホテル』
東野 圭吾 著
集英社

「世の中の人は皆仮面をかぶっている。」この作品の言葉である。僕はこの言葉を読んだときハッとした。確かに今のこの世の中で、会社、学校、地域の集まりといった様々な人の集まる場所で、自分の本音をさらけ出している人は少ないのではないだろうかと思う。大抵の人は仮面をかぶり、自らが課したキャラクターを演じているのではないだろうか。そういった現実の一面と関連している。この作品は、社会というものが少し見える作品だ。(米原高校2年 木下 翔梧さん)



『ラブラスの魔女』
東野 圭吾 著
KADOKAWA/角川文庫

あなたは、未来が予測できるなら、もしそんな能力を手に入れたらどんなことができるだろうと考えたことがあるだろうか。物語の主人公が出会ったのは、未来を正確に予測できる不思議な少女、円華。彼女の秘密を探るうちに国家ぐるみの恐ろしい事実が明らかになる…。この小説には、実在する理論などがたくさん盛り込まれており、とてもリアルで引き込まれる。今までとは一味違う新感覚のミステリーなので、ぜひ読んでみてほしい。

(守山高校2年 新原 菜摘さん)



『生きていくあなたへ 105歳どうしても遺したかった言葉』
日野原 重明 著
幻冬舎

この本は、医師の日野原重明先生が、亡くなる前に書かれた本だ。「自分らしく生きていく秘訣はありますか。」や「最愛の人が病気になる時なんと声をかければいいか。」などの質問に先生が答える。先生の言葉と自分の人生を重ね合わせると、「あの時こうしとけばよかった」という後悔、逆に「次からはこうしよう」という参考にもなる。また、105歳という人生経験豊富な先生の答えだからこそ、心に響く言葉に注目してほしい。

(米原高校1年 上田 萌心さん)



『ボッコちゃん』
星 新一 著
新潮文庫

話の幕の閉じ方には、大きく分けて、ハッピーなものやバッドなものがある。しかしそのどちらでもないのが、この作品だ。一つの話が短い分、終わりのオチが大きいのであまり深堀りは出来ないが、一つ「鏡」という話を紹介しよう。話は、男が鏡から悪魔を捕らえる事から始まり、妻と共に悪魔をいじめる。その後、悪魔を逃してしまい…。という話だ。ショートショートの名手、星新一が描くユーモアの世界にあなたも読みほれるはずだ。(虎姫高校1年 廣畑 亮太さん)



『竜とそばかすの姫』
細田 守 著
KADOKAWA/角川文庫

この物語の主人公 鈴は、自分に自信が持てず、心を閉ざしている女子高校生ですが、インターネット上の超巨大仮想空間「U」に「ベル」として参加すると、堂々と歌い、自分の意志を貫く力強い女性となります。この印象的なギャップと、鈴が「竜」と出逢い、助けようとするうちに現実世界にも心を開いていく様子は、きっとあなたの心も震わせるでしょう。映画の原作でもあります。映画を観る前でも後でも楽しめる一冊です。

(大津高校1年)



『15歳のテロリスト』
松村 涼哉 著
KADOKAWA/メディアワークス文庫

この本は少年犯罪について深く触れたお話で、1日で読み切ってしまうほど話に入り込める素敵な物語です。話では少年法や誹謗中傷に関する話題に触れていたり、家族が殺された被害者側家族と、身内が少年犯罪を起こし世間から非難される加害者側家族、それぞれの悲しみや苦しみ書かれているため、どちらにも共感でき、現実と同じような誹謗中傷についても考え直す機会となる作品です。

(大津高校1年 桑本 愛紅さん)

『銀河鉄道の夜』
宮沢 賢治 著
明治図書出版

「ほんとうのさいわいは一体なんだろう。」これは二人の少年が、銀河の旅で本当の幸せを探す物語だ。貧しい少年ジョバンニは、お祭の夜、気がつくや宇宙を巡る不思議な鉄道に乗っていた。そしてそこには彼の親友、カムパネルラがいた。二人はさまざまな人と出会いながら宇宙を旅する。そしてその旅が終わるころ明らかになる衝撃の事実。あたたかく、切ない二人の友情に胸が締めつけられる一冊だ。ぜひ手に取ってほしい。

(国際情報高校1年 三田 真羽音さん)



『余命3000文字』
村崎 瑠璃 著
小学館文庫

「あなたの余命はあと3000文字きっかりです」この衝撃の一言からはじまります。物語が終わるまでをカウントし、わずか3000文字の中で次々と展開が変化していくのが面白い本です。その他にも、短編集ですが、どれも一文目から気になって、とても読みごたえがあります。短い文章で読者を物語に引き込ませる巧みな言葉運びに圧迫されます。通学や朝読書などのすき間時間にぴったりです。

(米原高校1年 伊藤 莉子さん)



『友達ゼロで不登校だった僕が 世界一ハッピーな高校生になれたわけ』
よしあき 著
KADOKAWA

この本の筆者である「よしあき」は、幼少期にクラスのみんからいじめられて不登校になり、家庭内暴力や自殺未遂までも起こした。人生どん底だったが、フリースクールでの恩師との出会い、姉の影響で原宿に出会い、自分らしさというものを見つけ、好きがどんどん自信につながっていきます。高校に入学し初めて出た友達や、支えてくれた家族のおかげで今の自分がいる。人という存在がどれだけ大きいかわかることが出来る本です。(国際情報高校1年 大野 心愛さん)